

中学校「総合的な学習の時間」における授業の実際

～職場体験学習で得られる力とは～

Practice of “comprehensive learning period” in junior high school

竹澤 清美

Takezawa Kiyomi

Key words: 学びを生かす

はじめに

次期学習指導要領では、各学校が教育活動を進めるに当たって、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通し特色ある教育活動を展開する中で、「確かな学力」・「豊かな心」・「健やかな体」（＝知・徳・体）の体現を図り、子どもたちに「生きる力」を育むことを目指している。

これを受け、埼玉県教育局は、「授業改善リーフ第2集」で、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善の視点として「アクティブラーニング」をあげ、

1、見通しや振り返りを重視する

子どもたちが見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる**主体的な学び**ができているかどうか

2、相互作用を重視する

他者との協働や外界との相互作用を通じて、自己の考えを広げ深める、**対話的な学び**が実現できているかどうか

3、プロセスを重視する（学びの過程を大切にする）

習得・活用・探究というプロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた**深い学び**が実現できているかどうかの3点を獲得すべき項目に位置付けている。

では、「アクティブラーニング」で子どもたちに何を身に付けさせようとするのか。

それは、「**主体的な学び**」・「**対話的な学び**」・「**深い学び**」から、生きて働く知識・技能を習得し、未知の状況

にも対応できる思考力・判断力・表現力等を育成し、学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力・人間性を涵養することである。

つまり、凝縮すれば、**子どもたち自身が人生を生き抜くための力を身につける**、ということになる。背景には、社会の目まぐるしい変化、グローバル化、AIに象徴される情報化社会に、教育が追いついていない現状がある。また、一方で、不登校・いじめ問題・貧困問題といった現代社会のひずみのなかで生きる人々に、この改定における教育がどんな役割を果たせるのか、今後さらに問われることになるだろう。

国立教育政策研究所生徒指導研究センターによると、平成16年度現在、全国の公立中学校の89.7パーセントで職場体験が実施されている。実施期間は3日以内がほとんどだ。しかし、文部科学省は週5日の職場体験を実施している学校の家庭・保護者、学校等から、成果が上がっているとの報告を受け、「キャリア・スタート・ワーク」における望ましい職場体験期間を5日以上としている。

文部科学省は平成17年「中学校職場体験ガイド」を示し、関係機関（学校、企業・事業所等、家庭・保護者、等）が一体となって、より一層、中学校の職場体験を推進・充実させることを求めた。それは、高等学校におけるインターンシップへ、さらに大学における様々な実習

(単位認定を含む)へ系統的につながるものであろう。

その目的や意義は納得できるものの、多くの現場からは悲鳴が聞こえてきそうである。特に受け入れ側の企業や事業所はひと月半(5日×5校だとして)もの間、職場担当者を配置することになる。人材育成や地域貢献のための必要性、有効性を理解しているからこそ受け入れてくださるのである。しかし、あまりにも負担が大きいのではないだろうか。ボランティア精神・責任感に甘えるだけの職場体験ではいつか破綻が生じるのではないかと懸念する。中学生の5日間の職場体験実現は関係各所の十分なコンセンサスを得る必要がある。

〈職場体験学習の実際〉

それでは、現行の指導要領のもと実施された職場体験学習のあらましを振り返ってみたい。

埼玉県のある中学校では、今年度(中学二年生の一学期の終わり)、二学年174名(内不登校等10名欠席)が職場体験学習に参加した。その内支援学級の生徒6名全員も3日間頑張り通すことができた。

昨年度からの特別活動・総合学習の年間計画、今年度に入ってから的事前学習と例年同様のプログラムに従って進めてきた。その有用性と課題をみつめたい。

(1) 職場体験の後で、子どもたちの意識の変容が見られる

○事前

●不安(・仕事内容・コミュニケーション能力・希望通りでない職場・一緒に体験する仲間との関係づくり・創意、工夫・健康面・意欲の持続・体験の必要性等)

○事後

●発見(・働く意義、大切さ・働く喜び、楽しさ、厳しさ・認められる嬉しさ・父母への感謝の念・家族との対話、会話の機会・社会への関心・進路への意識の芽生え・学ぶことへの興味・社会への関心・新たな仲間の素顔・達成感等)

(略) 2日目は縦割り保育でシャボン玉作り。楽しかったけれど、焦ったことも。一人の子がシャボン玉を吸ってしまった。すぐに先生が飛んできてくれてすごく助かった。(略) どうして資格がないとできない仕事なのか分かった。 <〇〇保育園 Kさん>

(略) 1日目の午前中は納品の作業を中心に行った。品物はとても重く冷蔵庫はとても寒かった。その中で私が学んだことは、古いものから使うために、新しくきたものは奥に入れて古いものは前に置くということだった。他にも… <飲食店 Nさん>

(2) 課題

○不登校生徒の参加

●参加意欲の涵養→諸手続きの簡便さ或いは省略の可能性(企業・事業所の了解)

最も自立することが求められる子どもたち。

人間関係スキルの問題、意欲があっても必要な書類を間に合わせられない、初めの一步が踏み出せない、3日間持たない…など個々の事情は異なる。体験ぎりぎりまで調整するも諦めるケースがほとんど。今回不登校生徒10名中たった一人、たった一人だが、数時間だけ登校して図書室での環境作りの仕事をする事が出来たのには、学年教師全員が励まされた。何より本人が自己有用感をほんの少しでも持てて次の行動につながれば、と願わずにはいられない。

○健康・安全面

- 通勤時の事故(緊急事態発生時の対処、連絡)
- 雨天、酷暑時の健康維持
- 勤務時の事故(落ち着いた行動・冷静な判断)
- 急な体験場所の変更

今回通勤時の自転車事故が発生した。散歩中の方がすぐに救急車を呼んでくれたのだが、一緒に通勤するメンバーの対処も見事だった。焦りはあったろうが、班長を中心に、体験場所への連絡は勿論のこと、学校への連絡もすぐに行った。幸い本人の怪我も完治し、精神的な不安も最小にとどめることが出来た。事前学習が生きた出来事だった。

○ルール・マナーの涵養

●挨拶 ●気のきく言動 ●限度を知る、判断できる知恵

この中学校はN市の真ん中に位置するため、農家も多い。農家の朝市に参加した生徒のエピソードに沢山の人が感心させられた。ある男子生徒が学校生活では見られない力を発揮して、用意した

野菜を完売したのである。見事な口上とさばきで購買者の心をつかみ、仲間の賞賛を浴び、オーナーからも絶賛された。野菜の収穫や整え方といった仕事では他の生徒に大きく後れをとるが、他の生徒が整えたものを片端から売りさばく力は他の追従を許さなかったのである。お互いの得意分野を生かした役割分担と考えれば、見事な連携プレイと言えるだろう。知られざる生徒の一面に出会えるのも、職場体験の良さである。

課題もたくさんある。課題に出会うたびに判断力や実践力が試されていることを実感し、悩み、試行錯誤し、工夫する。このサイクルが子どもたちを主体的な人間に育て上げる。

○家庭、保護者の協力

- 意義の理解
- 時宜に叶った職業観の交流（親子で）
- 機会を捉えた振り返り
- 企業、事業所との交流

3日間家に帰ってくるとどっと疲れが出て眠ってしまっていました。働くことがどれだけ大変かを実感したのではないかと思います。

<保護者 Y>

自分で考えて仕事をこなすのも大事だ。今回失敗したことを次回やれる機会があったら頑張れ！

<保護者 M>

○小中連携のありかた（次項参照）

- カリキュラムの共有、交流

(3) 学校のビジョンの確認

○受け入れ先の発掘及び次年度以降のお願い（断りも含む）

○企業・事業所の職場体験に対する思いを知る（アンケートの実施及び結果の分析→職員との共有）

○次年度への引継ぎ・年間計画の見直し、修正等があげられるだろう。

小学校でもキャリア学習を実施してきたはずだが、**中学校で進路学習やキャリア教育を始めようとする**と、「働

総合的な学習の時間の目標を達成するためには、小・中学校の教師がどんなカリキュラムで、何を学んで子どもたちが進級してきたのかを交流する必要がある。その意味するところは単なる効率化だけではない。指導方法を交流する中で浮きぼりになる

くこと」についての意識が極めて低い（あるいはほとんど無い）ことに驚かされる。将来の職業について考えたことはない、具体的イメージもないし、あまり考えたくない就先延ばしにする者もいる。自己肯定感も極めて薄い。この現象は今、目の前にいる子どもだけ・思春期だけに特有のものなのだろうか。いや周りのクラスでも同じ思いをしている教師が多い。「なぜ、自己肯定感が弱いのか」を突き詰めても仕方がない。肯定的に自己を理解すること、自己有用性感を得るための方法を教育活動の中から、意図的に探さなければならない。

職場体験は現在の数ある教育活動の中で、自己肯定感を取り戻し、職業観を養うのに最も即効性のある取り組みの一つと言えるだろう。勤労観や職業意識の形成にも大いに役立つ。ただし、一過性に終わらせない事後の取り組みが不可欠である。せっかく芽生えた職業への興味や関心を無にしたら職場体験の有用性をも消し去ってしまうことになりかねない。**各学校のキャリア教育のデザインが問われるところである。どんなに時間がなくとも新聞作りによるまとめ、発表し合い、視野を広げるところまでは実施すべきである。**各教科、特に国語科と連携し、質の高い編集や発表で目標に迫れるようにしていきたい。

さて、「生きて働く職場体験」だが、子どもたちだけでなく、教師と地域のかかわりにも効果をあげている。職場周りをすると、地域の中での人とのつながりや保護者が見つけ広げてくれた職場など、思わぬ縁に出会うことがある。すっかり地域に定着した職場体験の歴史を目の当りにすることにもなる。親子二代で協力してくださる方にもお目にかかり、お話を伺ったこともあった。毎年職場周りをした数だけ、校内の遺産が増えていく。蓄積方法を大切に考えたい。では、課題の中で最も改善したいものについて述べていきたい。

《総合的な学習の時間を共有する小中連携》

○生徒指導連携に加えた、総合的な学習の時間のカリキュラムの共有

発達課題や校区内の地域の特徴が見えてくることが重要である。

それぞれのカリキュラムを交換するだけでどこまで力を蓄えられてきたはずなのか、次に獲得すべき力は何なのか知ることが出来るのは、中学

校としてはありがたいことである。さらに次年度はもう一步進めて小中学校合同で中学3年生までのカリキュラムをつくる方向にもっていったら、現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容

もかなりの部分で触れられることになるし、子どもたちの発達課題により即した適切な指導をすることができる。

例 小中連携総合的な学習の時間のカリキュラム

	小学校3年 (70時間)	小学校4年 (70時間)	小学校5年 (70時間)	小学校6年 (70時間)	中学校1年 (50時間)	中学校2年 (70時間)	中学校3年 (70時間)
進路 キャリア		「見つめよう身近な人の働く姿！」 (35時間)		「深めようなりたい仕事！」 (35時間)		「働くことの意義とは？」 (35時間)	全項目「はばたこう未来へ向かって!!」 (70時間) 学級or学年全体で発表会
伝統・文化	「探そう○△の達人！名人！」 (35時間)		「遺そう新座の歴史・文化遺産」 (35時間)	「深めようわが町○△！」 (35時間)			
郷土・地域							
環境	「探そう身近な自然！」 (35時間)	「学ぼうみんなに優しい町○△！」 (35時間)	「探ろう、食と安全」 (35時間)		「探そう、何ができる私たち？」1 (50時間)	「探そう何ができる私たち？」2 (35時間)	
心身の健康							

上記の例はかなり大雑把だが、たたき台としてはどうだろう。

これまでは生徒指導の連携のみが強調されてきたが、それだけではもったいない。他に小中交流授業(教師)や夏休みの補習(中学生が小学生に教える)も数年前から実際に行われていることだし、実現は十分に可能だろう。小中連携のすそ野を広げればいいだけのことである。

教育現場の仕事量は、増えることはあっても減ることはない。学習指導要領で、壮大な構想と子どもたちの未来を切り拓くに足る提言をしているのだから、それこそ、効率的に生かし切る方法を模索していかなければ

ならない。将来的には、小中、隔年で総合的な学習の時間の発表を見合うことがあってもいいだろう。さらに、子どもたちの発表を交流できるまでになったら、確実に児童生徒の力がついた証ともなりえるはずだ。

私たちは、どうしても発表となるとかまえてしまい、あれもこれもと欲を出してしまう。それがまた、仕事を増やしてしまう原因でもある。今ある機会を利用して次期の目標に迫る研究を実践していきたい。

告示) 総合的な学習の時間

【第1目標】

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問を見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することが出来るようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う

《大学教職講義における総合的な学習の時間の指導方法》

大学における総合的な学習の時間の講義は、いわゆる講義だけではなく、「演習」を加えた方法を毎回取り入れている。大枠としての「講義」(＝理論)は重要だ

が、実際の現場ではどのように計画され、実践されているか「体験」してみることで、具体的な側面を感じ取れるのである。

今年度の総合の時間で行った講義の一部を紹介したい。

講義1 学習指導要領「総合的な学習の時間」の第1目標 第2 各学校において定める目標及び内容
第3 指導計画の作成と内容の取扱い



講義2 職場体験学習(30時間)の計画と実際 ← イメージ化 ←→
演習1 「事前訪問での自己アピール1分間」 → 作成・グループ発表・意見交流

今回は、63名クラスでも21名クラスでも、同じ内容で試みた。無謀かな?大学生でもやってくれるかな?と不安を抱きながらのチャレンジだったが、案ずるより生むが易し。和やかな空気が醸し出され、講義室全体に活気が満ち溢れた。特に、21名クラスでは、それぞれが自分の役割を十二分に発揮し、講義の時間が不足するのではないかと心配するほどであった。

もう一点、取り入れたことがある。私が担当していた学生は「スポーツ健康学科」の生徒がほとんどであった。小中高の体育を担当することになる。「現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容」の「心身の保持増進に関する教育」と「職場体験学習」は具体的にどの場面でリンクするのかをグループで考え出しあった。

職場では?

体育科として?

家からの往復では?



例 健康管理、交通手段の安全確保等

職場A(保育園・幼稚園)では?



例 遊具の安全使用、健康、衛生等

職場B(飲食店)では?



例 食品管理と衛生管理等

職場C(猫カフェ)では?



例 動物の健康維持、衛生等

上記はほんの一部だけだが、各教科・領域とがどのように横断的に関連し合っているのかをイメージできる。国語科なら、スピーチの場面やお礼の手紙では表現方法で実際に生きて働く取り組みとして、総合学習が位置付けられていることを納得できるのではないだろうか？

大学生もアクティブラーニング、いや、大学生にこそアクティブラーニングが求められていると言えるだろう。課題を設定し、情報を集め、整理・分析してまとめ・表現することの楽しさ、仲間と協働し、互いの良さを生かし合えるのは得難いものである。現場に立

った時に、また立たなくても今の教育が何を目的に進もうとしているのかを知る一助となろう。

大学生の感想に、実習の感想を述べた者がいた。「仲間との意見交流が楽しかった。いろんな意見があり、正解は一つではないんだ、一つでなくとも良いのだ、と思えるようになって、人としての幅が広がっていく感じがした。実際に教師になったら、いろんな子どもたちの意見に耳を傾けたい。イメージが湧いてきた。」

これは、特別活動の授業の感想だが、総合学習でもさらにアクティブラーニングを増やし、具体的イメージが膨らむ授業を展開していきたい。



掲載した写真は許可を得ています。

